

来日 47 年のアメリカ人教授が語る「日本人がもっと宗教を学ぶべき理由」

会社で、友人同士の飲み会で、あるいは恋人同士で語る時、日本人が何となく避ける話題がある。宗教だ。来日 47 年を迎える上智大学総合グローバル学部教授でカトリック司祭のデヴィッド・J・ウェッセルズ先生は「世界は政治と宗教が絡み合ってきている。日本人はもっと宗教について学ばなければならない」と説く。



上智大学総合グローバル学部教授デヴィッド・J・ウェッセルズ先生

アメリカ同時多発テロを目撃した年代と、その後の年代の異なる世界観

「現代世界の混沌は、2001 年のアメリカ同時多発テロから始まりました。誰もが政治と宗教の関係がこれからの世界の重要課題であるとわかった重大事件でした。しかし、政治と宗教における課題は文明の初めからずっとあったものなのです。古代エジプト、古代メソポタミア、古代インド、古代中国……。すべて政治と宗教が絡み合っていましたし、それは現代まで続いています。世界は、政治と宗教で動いている。そのことを日本人は知らなさすぎるのではないかと思います」とウェッセルズ先生は語る。

ウェッセルズ先生は 1970 年に初来日し、1972 年上智大学に奉職した。1976 年にアメリカに戻って博士号を取得したあと、1981 年に再来日、上智大学で国際関係論を教えるかたわらイエズス会司祭としても活動している。今秋、ウェッセルズ先生は上智大学公開講座で「政治と宗教の課題」と題して 4 回の講座をもつ。そこで、来日 47 年目を迎えるウェッセルズ先生に、先生がこれまで見て来た日本について、そして宗教と政治について学ぶことの意義を訊ねた。

「私が来日したのは 1970 年でした。それから 47 年。日本もアメリカも若者の意識がものすごく変わったと思います。たとえば、今の大学生と 16 年前の大学生とではまったく世界観が違っていると感じます。2001 年の

アメリカ同時多発テロの時に、世の中や物事が理解できる大人であったかどうかで違うのです。あの同時多発テロこそ、宗教と政治の関係が注目されるきっかけとなりました」

16年前の9月、ニューヨーク世界貿易センターのツインタワーに航空機が突入、炎上爆発して超高層ビルが崩壊するまでの一部始終を、アメリカのみならず、世界中の人がテレビを通して目撃した。その日、目に焼き付いたものを一生忘れることはないだろう。しかし今18才の大学生は当時2才。今の大学生は同時多発テロ発生後の世界しか知らない。

世界各地で学生が決起した1968年

「若者は最も時代の流れを受ける人々です。とても変わりやすい。それは私が来日した1970年頃もそうでした。

1968年、世界中で学生が政治に対して反乱を起こし始めました。アメリカの大学ではベトナム戦争の反戦運動が渦巻き、パリでは学生を中心に5月革命が起きました。日本でも学生運動が次々起き(東大闘争、日大紛争)、世界各地で同時多発的に学生が蜂起したのです。その原因のひとつにベトナム戦争があるのは事実ですが、それだけではありません。東欧ではプラハの春が起き、中国では1966年に始まった文化大革命の真っただ中で大学などの高等教育は10年もの間麻痺しました。

その当時は、日本でもあちこちの大学のキャンパスで、ヘルメットをかぶって竹の棒を持った学生を見たものです。しかし私がいったん日本を去る1976年までには、学生は驚くほど変わっていきます。学生運動は影を潜め、キャンパスにリクルートスーツが目立つようになりました。そして、6年ぶりに戻ったアメリカでも同じ変化が起きていました。学生たちは政治から離れていったのです」

オウム真理教事件の後、宗教は一種、タブー化した

ウェッセルズ先生は1981年再び日本の土を踏み、上智大学で国際関係論を教えながらカトリック司祭としても活動した。その頃は学生とも宗教について気楽に語り合う雰囲気があったという。その空気が一変したのは、1995年である。

「1995年3月20日、地下鉄サリン事件が起きます。オウム真理教が起こした事件の非道さもさることながら、その中心を担ったのが優秀な大学生たちだったということが、世間を驚かせました。この事件の後、日本人学生との間では、宗教の話がしづらくなりました。原理主義という言葉はもうその当時世界中で使われる概念となっていました。このオウム真理教の事件をきっかけに「カルト」という言葉が日本でも使われるようになり、宗教を怖いもの、危険なものにとらえる雰囲気が生まれていったと思います」

宗教と政治が分離できないというのは世界の常識

「そして2001年のアメリカ同時多発テロが起きます。政治と宗教が世界を動かしているということに日本人も気づいたのではないのでしょうか。しかしそれは、日本国内でもずいぶん前から起きていたことです。たとえば靖国神社の問題は政治の問題でもありますが、宗教の問題でもありますよね。

世界には宗教と結びついた政党・政治が多数あります。キリスト教民主主義の政党はヨーロッパに数多くありますし、イギリスの君主のエリザベス女王は英国国教会のトップでもあります。インドの政治はヒンズー教に基づいた政治ですし、もちろんイスラム教国だと宣言している国は世界中に沢山あります。

世界では政治と宗教が結びついていることが普通なのです。私は完全な政教分離というものはありません、と思います。なぜなら、宗教を行うのは人間。政治を行うのも人間。人間のすることを分離することなどできないからです。また、政治の歴史は「宗教の自由」を獲得するための歴史でもありました」

宗教というものを理解しないと世界は理解できない、とウェッセルズ先生は語る。10月から始まる講座「政治と宗教の課題」では、4回にわたって宗教と政治の関係を論じるという。日本人も陥ってしまった宗教アレルギーから脱して、真剣に宗教と向き合わなければならない時代が来ている。

(続く)

取材・文・写真／まなナビ編集室

来日 47 年のアメリカ人教授が語る「政治と宗教に必要なものとは」

イスラム国の報道を見聞きするたびに疑問に思う。人々の平和と幸福を願う宗教がなぜこのような残虐なことができるのか、と。来日 47 年目を迎える上智大学総合グローバル学部教授でカトリック司祭のデヴィッド・J・ウェッセルズ先生は、政治と宗教の関係を考える重要なキーワードとして「寛容」をあげる。その言葉が指し示す意味は何か。(前の記事「来日 47 年のアメリカ人教授が語る「日本人がもっと宗教を学ぶべき理由」)



上智大学総合グローバル学部教授でカトリック司祭のデヴィッド・J・ウェッセルズ先生

私たちの教えがなぜ戦争や暴力へと導かれるのか

ウェッセルズ先生は 1970 年に初来日し、1972 年上智大学に奉職した。1976 年にアメリカに戻って博士号を取得したあと、1981 年に再来日、上智大学で国際関係論を教えるかたわらイエズス会司祭としても活動している。

ウェッセルズ先生は、この秋、上智大学公開講座で「政治と宗教の課題」と題して 4 回の講座をもつ。各回のテーマは「現代の宗教と政治ーテロ？ 平和？」「歴史における宗教と政治の和解」「近代の政教分離」「バチカン外交を含む事例」である。これらを考えるとき、理解しておいたほうがよいキーワードについて訊ねた。

「政治と宗教について考えるとき、とても大切なのが“寛容”ということです。その大切さを知るためには「宗教の自由」について学ぶことが大切です」(ウェッセルズ先生。以下「」内同)

「宗教の自由」はなぜ世界各国の憲法に入っているのか

「幕末の 1858 年に日本とアメリカの間で結ばれた日米修好通商条約がありますね。この条約には、「宗教の自由」の項目が入っています。すなわち、日本に滞在するアメリカ人が自由に自分の宗教を実践できると定められています。このことを日本人はほとんど知りません。当時これにサインした日本人は「宗教の自由」がどういうことなのかわかっていたのだろうかという疑問に思います。おそらく理解できないままサインしたのでしょう。しかし「宗教の自由」ということは、近代国家が交流する時にそれほど必要なことだったのです」

ウェッセルズ先生によれば、現在、世界中の国の憲法で、「宗教の自由」を謳っていない憲法はほとんどないという。

「なぜ「宗教の自由」をわざわざ憲法に入れなければならないのか。それは「宗教の自由」がなかったら、「宗教の自由」が奪われやすいからです。宗教は人間の精神と深くかかわるもの。昔はそこに自由はなかったのです。それが認められ始めたのは、ヨーロッパでも 17 世紀あたりから所によって少しずつ、という感じでした。アメリカでは、合衆国憲法の中の基本的人権にかかわる修正第 10 条が 1789 年に定められ、その中に宗教の自由が記されました」

「宗教の自由」を認める政治、認めない政治

「宗教の自由」の根底にあるのは寛容さだ。政治がさまざまな宗教の自由を認める寛容さ、そして宗教が他の宗教を認める寛容さ。だから全体主義・独裁主義は宗教を嫌うという。

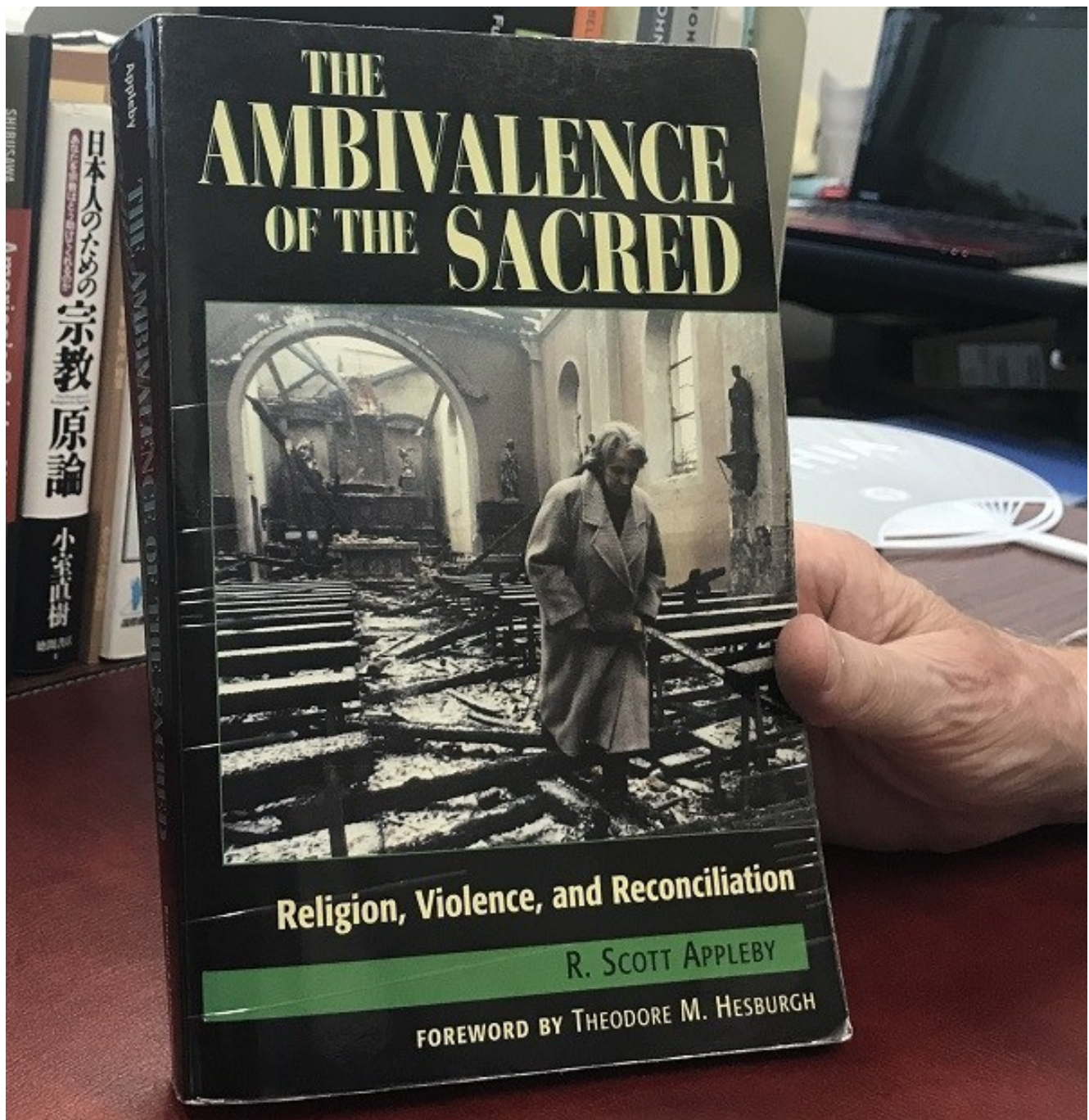
「ナチズムはユダヤ教を認めませんでした。また、中国の憲法には「宗教の自由」が書かれていますが、実際には、中国共産党のコントロール下にある宗教しか認めない。なぜ独裁主義が宗教を嫌うかわかりますか？」

宗教は自分を越えるものの存在を認めるもの、信者同士の精神的な連帯を築くもの、それゆえに嫌われるのだろうか。

「そうです。しかしそれを求めるのが人間の本質なのです。宗教は人と人をつなぐ絆でもある。独裁主義者は、人が支配者のコントロールを離れてつながることを極端に恐れます。いま中国ではキリスト教信者が拡大しており、中国共産党は脅威に感じています」

そして先生は 1 冊の本を紹介した。

事例と文献



THE AMBIVALENCE OF THE SACRED—Religion, Violence, and Reconciliation

『THE AMBIVALENCE OF THE SACRED』。副題には「Religion, Violence, and Reconciliation」とあり、直訳すれば「神聖なものあいまいさ—宗教、暴力、和解」だろうか。

「現代世界における宗教のイメージはあいまいです。本来、政治も宗教も、人々の平和と幸福を願うもの。けれど、ただ宗教の旗を掲げて暴力をふるう人もいます。世界中の平和を求める宗教者は、どうして私たちの貴重な教えが暴力や戦争に導かれるのだろうか、みな悩んでいます。ある宗教者は暴力をふるい、ある宗教者は平和を求める。しかしそこにシンプルな答えはなく、多くの本が出ています。この本もそのひとつです」

ウェッセルズ先生は2010年に始まったアラブの春にも触れた。

「チュニジアから始まったアラブの春と呼ばれる民主化運動がありましたね。北アフリカと中東の政治が、次々と独裁政権から民主主義へ変わってきましたが、その民主主義には宗教的寛容さがかけていました。宗教の自由は民主主義によって自然と導かれるものではなく、政治が宗教に対して、宗教が政治に対して寛容でなければなりません。ステパン (Alfred Stepan) という政治学者はこれを双子の寛容 (twin tolerations) と定義しています。権利と寛容は結びついています」

宗教者による「和解」と「祈り」

ウェッセルズ先生に訊ねた。「寛容性を欠く社会の中で、人々が平和に暮らすために宗教者ができることは何なのでしょうか」

「基本的なものは、祈りです。今までも平和のための祈りがたくさん行われてきました。平和を考え、祈ることがとても大切なことなのです。そして、対話と和解。たとえば真実和解委員会 (重大な人権侵害があった場合、過去の経緯を明らかにしながら敵対したもの同士が和解していこうとする取り組み) にも宗教は大きな役割を果たしています。

もう一つの事例は、2017年9月6日から10日まで、教皇フランシスコがコロンビアを訪問しました。その目的は、60年続いた内戦が終わったコロンビアのこれからのために、対立していた政府やゲリラを含めて国民和解のための祈りの集会を開くことが目的でした。コロンビアは国民の9割以上がカトリック信者です。教皇は今までも何回もコロンビアを訪れ、平和の祈りをしてきました。これがバチカン外交の事例の一つなのです。宗教の「対話」と「祈り」は平和をもたらす力があるのです」

取材・文・写真／まなナビ編集室